

# 絵画における美術解剖学的研究

——「騎馬図巻」について——

柴田 眞美\*

An Artistic Anatomical Study of Pictures

——Examining the “*Kiba-Zukan*”——

Mami Shibata

**要 旨** 筆者は、大学の学部時代より、これまでに一貫して、馬をモチーフに、日本画の制作を続けてきた。描かれる馬は、時に生きた馬であり、時に骨格である。生体の外形を外から観察して、写生し、描いて行くだけでは、何か、生命の奥底に触れる作品に成り得ないとの思いから、大学院では「美術解剖学」を学び、内部構造の習得に努めた。そのような中で、一見して、科学的・解剖学的視点からは遠いように思われる、東洋画、および日本画で描かれた絵画の中に、きわめて解剖学的な観察眼の跡が見出される事に、興味を持ってきた。本研究は、そのような長年の思いの中で、わが国、鎌倉時代ごろの作と言われる、根岸競馬記念公苑（馬の博物館）蔵の「騎馬図巻」（「調馬図巻」とも呼ばれる）を、目近に観察し、調査する機会を得たので、人物の装束や持ち物、扶助（馬への合図）、馬の馬装、歩法・姿勢・行動や表情、その他について美術解剖学的に観察した。その結果、同時代ごろ制作の「隋人庭騎絵巻」に比較して、やや粗い表現に見受けられる本「騎馬図巻」の中にも、ある程度の写実性が探し出せる可能性が示された。

キーワード 騎馬図巻 美術解剖学 日本画

## I 序 文

### I-1) 本絵巻および過去の研究経過

本研究の対象とする「騎馬図巻」は、現在、根岸競馬記念公苑（馬の博物館）に所蔵されている。紙本着色、一巻、縦35.6cm、横512.1cm。料紙が各場面ごとに切断されていることなどから、かつて、屏風か襖に貼られていたものであるとされている。

制作年代については、鎌倉時代末期ごろと見られている。現在「晝所預土佐左近将監長隆筆／前左近少進光芳證」の奥書をとまなっている。

なお、東京芸術大学所蔵の「探幽縮図」の中に、本図とよく似た絵が見出される。また、よく似た絵として、土佐守光起筆の「責馬秘術図」も存在している。上記三図の中では、本「騎馬図巻」が最古であろうとみられている。本「騎馬図巻」は別名「調馬図巻」とも呼ばれるところから、馬を「調教」している場面を描いていると考えられ、ならば、単なる絵そら事ではなく、実際の調教が示される程度には事実性、写実性が描きこまれていると考えるのは妥当である。

絵画内容については、「あばれる馬とそれを曳いたり、乗りこなそうとしている12組」、あるいは、「馬をひいている公家や調教している武士など、馬に関する12の場面」とされている。美的価値については、「退色が目立つものの、量感の

\* 本学助教授 日本画・美術解剖学

ある馬と、表情豊かな人物を捕らえて動勢のある画面を作っている。」「それぞれの人物や馬の描き方も細かく、ひとつ一つの絵になんとなくコミカルな感じがただよっている。」と評されている。

本絵巻の美的価値、および作者、制作年代、描かれた目的、様式などに関する詳しい研究は、美術史的な研究に待つ他はないが、本絵巻に描かれた人物と馬の姿態が、馬術および馬匹外貌学からみてどのように表現されているか、についての本格的な研究はむしろ、まだ行われていない。

### I-2) 筆者の研究歴および本研究の動機

筆者は、日本画の作家であるが、生物の形の奥に潜む、そこはかたない生命感を表現していきたいと願っている。そのような思いから、「美術解剖学」を修め、動物の内部構造を勉強してきた。また、これまで、洋の東西を問わず、さまざまなジャンルの馬を描いた作例について、美術解剖学的に分析を試みてきた<sup>1)~4)</sup>。

東洋画、日本画における馬の絵画は、西洋のルネッサンスから19世紀にかけての、いわゆる(西洋的な)写実的表現の絵画に比べて、単純化され、様式化されているような印象を受ける。しかし、だからといって東洋画では、馬の観察眼の跡が薄いと、必ずしも言い切れない。芸術の中には、見かけの複雑さと解剖学的非事実が結びつき、見かけの単純さと解剖学的事実が結びついている例も多い。その面から、それぞれの作品の作者が、対象を「いかに見て」、「いかに表現」したかを、解剖学の「眼」をもって探ることは、まことに興味深い。

さて、一見して、様式的で、単純化されているように見える日本絵画の中に、解剖学的観察眼の跡を探ろうともくろめば、対象とする作品は、単純に馬を題材にしているだけではなく、「馬術を描こうとしている図」である方がふさわしい。現象上(本研究では、馬術的)、形態上(同様に、外貌学上)の両面からの合理性について、追求可能となるからである。このような、

「騎馬図」は、日本絵画としては珍しく、見出すのがなかなか困難ではあるが、本「騎馬図巻」は、馬術自体をクローズアップして表現しようとしている点で、そのための対象としてふさわしい。

また、すでに同様の研究がされている「隋人庭騎絵巻」と、制作年代が比較的近いことから、この絵巻との比較検討が可能である。

なお、筆者が本「騎馬図巻」と初めて対面した時には、静かなる感動を覚えた。

まずは、馬術自体をクローズアップしたのではないかと、思える絵巻物と出会った、ということである。だいたい、退色が目立つが、近づいてみると、馬装(殊に、鞍や鐙)にやや不明確な感じが漂うものの、人馬はまことに確信的に、確固たる形態が描かれている印象である。馬という動物の構造がわからないまま、日本画の筆遣いにたよって、形式的に描いたという感は薄かった。また、人馬の調和(馬術上の)がとれていて、さまざまな姿態が生き生きと描かれている。描く方向も、側面だけではなく、前後など、比較的描きにくいアングルの様相が描かれている。単純に、「絵柄」として、馬を描き出せばいいのであれば、このような苦心をあえてする必要はあるだろうか。これだけの、さまざまな姿態としっかりとした描き方の中には、馬術および馬匹外貌学の意味を探し出して行くことは、充分可能であろうと思われた。しかしながら、しっかりとした描写の中にも、やや不明確な印象を否定できない部分が存在する感も、拭いきれなかった。

本絵巻とよく似た模写が、少なくとも二つ存在する。本絵巻が、最古であると考えられていることから、本絵巻が原本となつて、模写がなされたのであろう。一度ならず、模写がなされるということは、原本に、それだけの、なんらかの「意味」が存在する、ということであろう。探幽らが模写をするほど、何か、意味があったのであろう。しかし、本絵巻の中にも、何か不明確な部分が存在することは、本絵巻自身もま

た、模写であり、さらに遡る、原本が存在していたのかもしれない。しかしながら、そのような大もとの原本があったにしても、現状ではもっとも古いとされる、本絵巻を分析対象にすることは、妥当であると考えられる。

いずれにせよ、馬術それ自体を描こうとした、数少ない日本絵画の作例の一つであること、描写がしっかりとしていること、「隋人庭騎絵巻」と制作年代が比較的近いと推定されていること、などから、本「騎馬図巻」を対象に、馬術および馬匹外貌学的検討（美術解剖学的検討）を試みることは、日本の絵画における動物画の写実的側面を追求し、ひいては東洋的美意識の表象への考察に進むために、有意義なものと考えられる。

## II 研究方法

### II-1) 本研究の資料

研究資料である本絵巻物は、根岸競馬記念公苑（馬の博物館）所蔵の実物を第一資料とし、その写真資料（約0.6倍に引き伸ばしたもの）を第二資料とした。

馬術についての資料は、

- ・馬術書（和式馬術を主に、洋式馬術も参考にしている）
- ・調教および儀式、試合などを撮影したテープや写真
- ・和式馬術の馬具、馬装
- ・和式馬術の専門家の意見（口伝によって今日まで伝承されている乗馬術）

馬匹外貌学についての資料は、

- ・馬匹解剖学および外貌学書
- ・日本の在来馬および古代馬についての研究文献
- ・馬の解剖の観察および写真などの記録
- ・馬の生態の観察および写真などの記録
- ・馬の歩法に関する研究文献
- ・馬の表情に関する研究文献

を用いる。

### II-2) 研究方法

上記の各資料を用いて、本「騎馬図巻」に描きこまれた、各場面の、人馬の様子や、表現のされ方に、馬術および馬匹外貌学上のどのような合理性がふくまれているか探る。

本研究では、そのための第一段階として、各場面の、

- ・人物の装束や持ち物
- ・馬の馬装
- ・扶助（人から馬への合図の様子）
- ・馬の歩法・姿態・行動
- ・馬の表情
- ・その他

について観察記録し、各場面が総括してどのような調教場面であるかを同定する。

なお、12の場面を、登場順に、「一号人馬」から「十二号人馬」と名づけた。

## III 分析結果

一号人馬から、十二号人馬の各場面についての、分析結果を示す。

[一号人馬]：長い引き手にて牽き馬

- ・装束および持ち物：帽子（黒）、上衣（白）、袴（代緒）、草履短刀か？、腰に下げているものは？
- ・馬装：裸馬、頭絡、馬銜（ハミ）、引き手（長）
- ・扶助：馬の前方、やや右に立ち、後ろを振り返りつつ引き手を引く、進行方向に前傾する（ひっぱる）、引き手を持つ左手の肘を張る、右手に引き手の端を握る
- ・歩法・姿態・行動：常歩が乱れあしになったところ、トモ（後軀）を上げ、尾を股間に巻き込む、首をあげる
- ・表情：瞳、耳が後ろを向く、口を割る
- ・その他：明らかに、何らかの状況下における馬の後方への注意と恐れ、それに対する人の反応
- ・総括：牽き馬中、馬が後ろの何物かに恐れをなして乱れあしをし、油断していると起立し

そうなるのを、引き手を持つ拳の操作で馬を前方へ誘導しつつ、全身の重心を進行方向へかけ、左腕(肘)を張ることによって、急な起立に備えているところ。なお、振り向いて馬を見ているが、視線は馬の顔からそらし、興奮させるのを防いでいる。

[二号人馬]：裸馬に騎乗。首を上げる馬に、背を正して乗る

- ・装束および持ち物：紋付、袴(うす茶)、帽子(黒)、素足
- ・馬装：裸馬、頭絡、馬銜(馬銜身は?)
- ・扶助：背を張り、腰(坐骨)を入れる、踵で馬腹を蹴る、手綱は緩める、伏せ拳
- ・歩法・姿態・行動：歩法不明?、首を上げる
- ・表情：鬣および耳は不鮮明、視線(瞳)上方、尾はやや上がる、舌を(馬銜の上に)越しているか?
- ・その他：無し
- ・総括：馬銜に反抗する馬を、坐骨を入れると共に、脚(踵)で馬腹を圧迫しながら、手綱をひっぱらず口をだましつつ、馬銜を銜えさせようとしているところ。騎乗者の視線が、馬の顔に向いているところから、馬の馬銜受けに注意を払っている所と思われる。馬銜を受けさせるために、馬銜に対する直接の扶助ばかりではなく、背・坐骨・脚(踵)を同時に使って、馬体全体を統一させて、手の内に入れようとしているあたり、馬術的である。

[三号人馬]：疾走する馬にまたがり、手をかざして遠くを見る

- ・装束および持ち物：帽子(黒)、上衣(白)、袴(薄茶、脚の前面の黒線は袴かそれとも鞍の煽りか?)
- ・馬装：鞍、鐙(不明確)、胸懸(ムナガイ)、尻懸(シリガイ)、頭絡、馬銜
- ・扶助：鐙に立ち、腰をやや浮かし、やや前傾姿勢で前方の遠くを見る。

手をかざす。長手綱で、腰を浮かし、馬を自由に大きく走らせる。

- ・歩法・姿態・行動：疾走(四肢を前後に広げる)、前肢は前膝を屈曲、右後肢の蹄は不鮮明

・表情：瞳は前方やや上方を見る、耳は後ろへ倒す(疾走スピードへの対応)、鼻腔と口は不鮮明

・その他：無し

・総括：疾走させる馬に乗り(馬にとって自然な楽な疾走)、遠くを見る。鐙に立ち、腰を浮かせてやや前傾姿勢である点、馬術的な扶助ではあるが、やや馬術的な意図がわからない例。

[四号人馬]：後肢を前後に開いて前軀を持ち上げる馬にやや前傾姿勢で乗る

- ・装束および持ち物：帽子(黒)、上衣・袴(黒)、靴か壺鐙(ツボアブミ)か?
- ・馬装：鞍、鐙(?), 胸懸、尻懸、頭絡、馬銜
- ・扶助：前傾し、重心を前にかけ、手綱をひっぱらない、(手綱の握り方が不思議?)
- ・歩法・姿態・行動：後軀を踏み込み、前軀を上げる、首を上げる、後肢は大きく一歩出る(前後に開く)、尾を挙げるか振る
- ・表情：瞳は上前方、口を割る、耳は不鮮明
- ・その他：無し
- ・総括：馬が興奮して立ち上がりそうなところを抑えているのか?

[五号人馬]：首を巻き込み、大きく後肢を上げた馬に、深い前傾姿勢で乗る

- ・装束および持ち物：帽子(黒)、上衣・袴(白)、靴か壺鐙か(鞍無しなので靴か?)
- ・馬装：裸馬、頭絡、馬銜、差繩(サシナワ)状のもの(どこからか?)
- ・扶助：大きな前傾姿勢、手綱は引っ張らず、脚は締めているのか、膝を伸ばす
- ・歩法・姿態・行動：大きく後ろに蹴り上げ(逆立ちのよう)、尾は巻き込む
- ・表情：耳、目は、騎乗者の方へ、口は割らない
- ・その他：無し
- ・総括：馬が反抗し、後軀を大きく跳ね上げたが、脚で(?)懲戒したため、馬が乗り手に注意を向けている

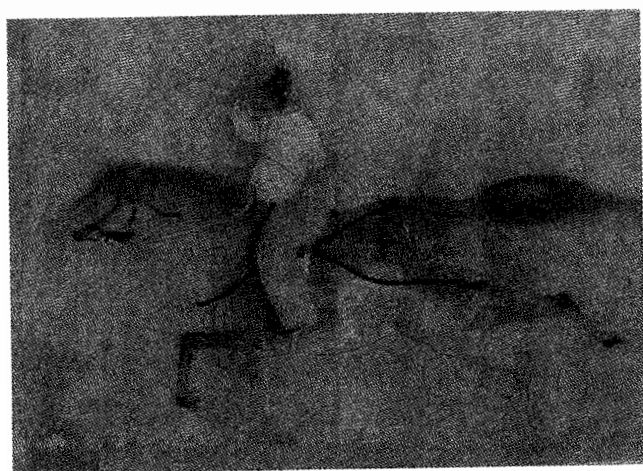
[六号人馬]：走りながら首を巻き込み、背を丸



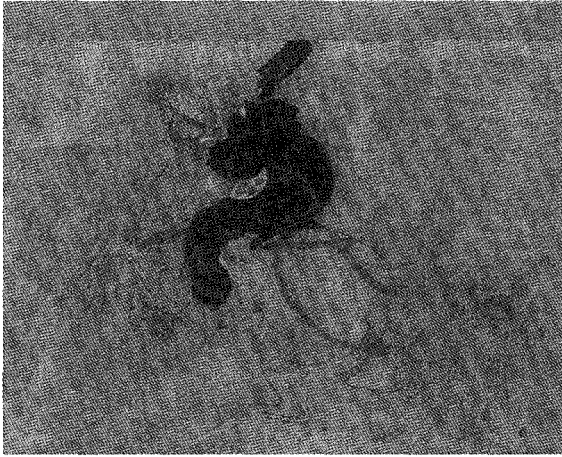
一号人馬



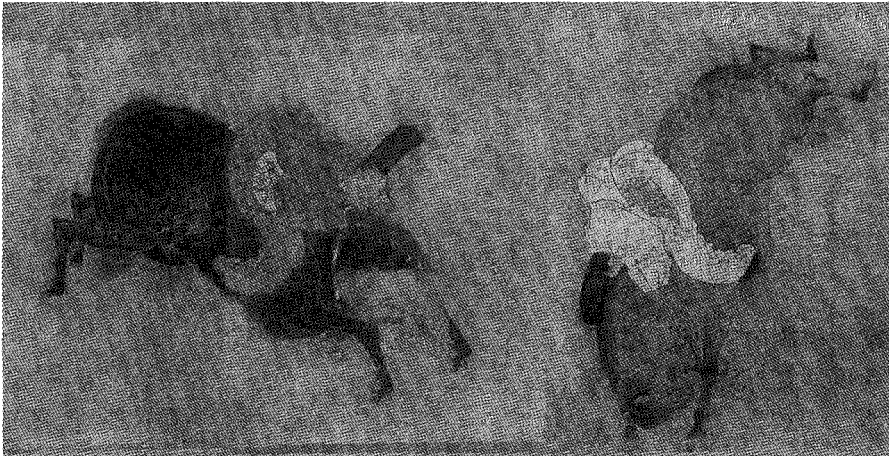
二号人馬



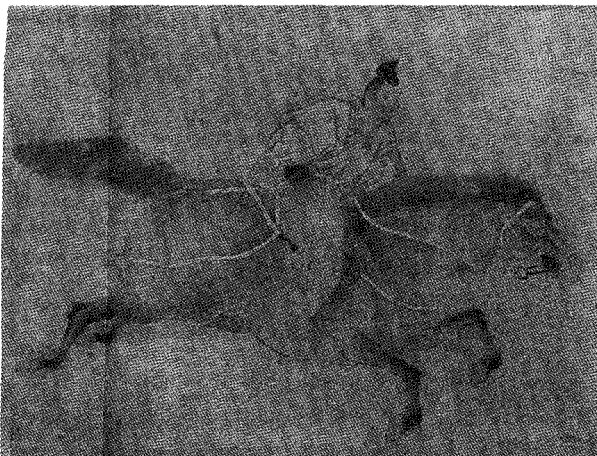
三号人馬



四号人馬



五号人馬(右)と六号人馬(左)



七号人馬

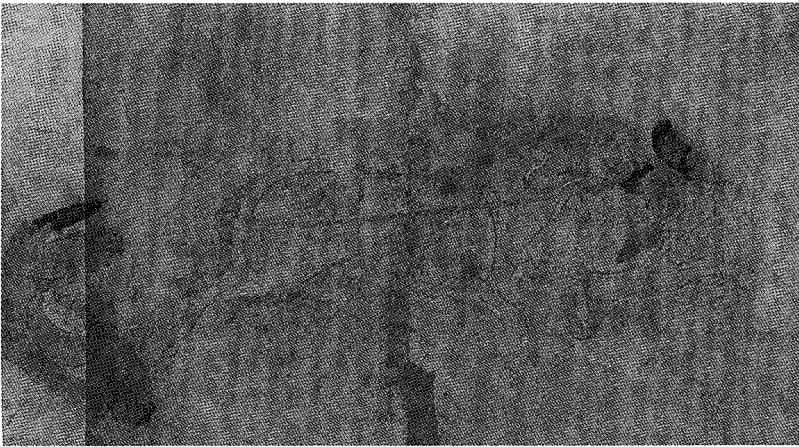




八号人馬（右）と九号人馬（左）



十号人馬



十一号人馬



十二号人馬

める馬に前傾で乗る

- ・装束および持ち物：帽子（黒）、上衣・袴（代緒）
- ・馬装：裸馬，頭絡，馬銜
- ・扶助：膝を曲げ，深い前傾姿勢。手綱をピンとはる，腰を馬背から浮かす，拳（伏せ拳か？），背を張る
- ・歩法・姿態・行動：走りながら首を巻き込み，背を丸める，尾を巻き込む，後肢の蹄不明瞭
- ・表情：耳は乗り手に向く，目はなお，前下方へ，口がやや開き緊張。
- ・その他：無し
- ・総括：馬が乗り手の意に反して，背を丸め跳ねようとする（元気があまって，張っているか，人を乗せることを拒む）のを，乗りこなす？  
なぜ，前傾姿勢か？

[七号人馬]：疾走する馬に鞭を使いつつ乗る

- ・装束および持ち物：帽子（小，黒），上衣（薄茶），袴（薄代緒），短鞭，腰に黒いものをつける
- ・馬装：鞍，鐙（不明瞭），頭絡，馬銜（左右の馬銜棒が下顎の下で一つになる），胸懸，尻懸
- ・扶助：やや前傾姿勢，早めの鞭（？），左手の片手綱，伏せ拳，踵を上げ，鐙に立つ，ゆるい長手綱
- ・歩法・姿態・行動：疾走，尾は離れる
- ・表情：耳（不明瞭），視線は前方（やや上方），口をわずかに割る，鼻腔はさほど大きくは広がっていない
- ・その他：無し
- ・総括：早めの鞭で，馬を速く走らせつつあるところ，馬銜が不思議である（調教の一環としてこのような手法が存在したのか？）

[八号人馬]：馬の右側から牽き馬（後方より見る）

- ・装束および持ち物：帽子（黒），上衣・袴（白），靴（黒）
- ・馬装：裸馬，頭絡，手綱
- ・扶助：馬の右側に立つ，馬の持ち方は見えない，右を向く

ない，右を向く

- ・歩法・姿態・行動：駐立または常歩（ナミアシ），右前蹄は不思議な形状，尾を高々と挙げる，右方に顔を向ける
- ・表情：右に顔を向けている，目，耳はわからない
- ・その他：無し
- ・総括：右方に何か気になるものが在り，馬が興奮して尾を挙げる。

そのポーズにより，馬の尻の構造がよく描けている。

[九号人馬]：騎乗しているところを前方より見る

- ・装束および持ち物：帽子（黒），上衣・袴（黒），その中（？）は赤靴，鐙不明瞭，短鞭
- ・馬装：鞍，鐙は見えない，頭絡，馬銜，差縄（？）
- ・扶助：右を向く，右手綱を引くかまたは開いている，拳は小指が引っ込むが手綱は薬指との間からは出ていない
- ・歩法・姿態・行動：常歩か？
- ・表情：耳，目は右を向く
- ・その他：無し
- ・総括：本格的な運動の前，常歩で入場したところか？

[十号人馬]：引き馬，馬は屈撓姿勢である

- ・装束および持ち物：帽子（黒），上衣・袴（黄土），その中は代緒，靴
- ・馬装：裸馬，頭絡は馬銜無し（無口），引き手
- ・扶助：左手で頭絡の右頬皮をつかむ，右手は引き手の端をまとめて腰の高さで持つ，体はやや右に開き気味
- ・歩法・姿態・行動：収縮姿勢（屈撓姿勢），左前肢は不意明瞭，
- ・表情：目は後下方を見る（乗り手を意識か？），耳は側方に向ける
- ・その他：無し
- ・総括：気合が入って，収縮し，ぐいぐい歩く馬を，頬革を持って牽いている

[十一号人馬]：走る馬を一人が後方から押さえ，



一人が前方で走る

- ・装束および持ち物：後方人物；帽子（黒），上衣・袴（代緒），その中は白，靴
- ・前方人物；帽子（黒），上衣・袴（白），その中は代緒，素足
- ・馬装：裸馬，頭絡，馬銜，索
- ・扶助：前方人物が左の索をゆるめてつかんで馬の顔の左ではしる，後方人物は右の索をつかんで必死に後ろに引きとどめる
- ・歩法・姿態・行動：走る，左前蹄は見えない
- ・表情：顔は二重描きか？目は前方へ，耳は後方へ
- ・その他：馬の顔と，前方人物の素足の理由？
- ・総括：二人牽きの馬が勢い余って走り出してしまったか？意味がやや不明確か？

[十二号人馬]：右側より牽き馬，馬はやや前駆を引き上げにかかる，後方にも人物

- ・装束および持ち物：前方人物；帽子（黒），上衣・袴（白），その中は赤，靴  
後方人物；帽子（黒），上衣・袴（薄茶），その中は白，素足？両手は顎紐を結ぶか？
- ・馬装：裸馬，頭絡，馬銜，引き手（の行方？）
- ・扶助：前方人物が，引き手を両手で持ち，馬の前駆が挙がるのを押さえる，後方人物は，馬より後方で走る
- ・歩法・姿態・行動：入れ込んでいる，後軀を落とし（収縮），首を上げ，前駆をやや挙げる
- ・表情：目と耳は上方へ，鼻腔は大きく広げられる
- ・その他：後軀のバランスが大きい
- ・総括：興奮して入れ込んでいる馬を引き手を持って押さえている，後方人物は，その人馬を追いかけているのか？

#### IV 結語および今後の展望

今回は，根岸競馬記念公苑（馬の博物館）蔵の，「騎馬図巻」についての，多角的な美術解剖学的研究の手始めとして，描かれた全十二人馬

の，馬匹外貌学および，馬術から見た場合の概観を観察した。

その結果，鎌倉時代ごろの作と推定されている本作品の中には，ある程度の，事象表出性および，写実性を見出していくことは可能であるという結論に達した。

今後，さらに，馬匹外貌学的，馬術的視点はもとより，「隋人庭騎馬絵巻」<sup>5)</sup>や西洋の作品で，類似ポーズで馬を描いているものなどとも比較していき，日本絵画の中に潜む，「東洋的美意識」へと，考察を進めたい。

#### V 謝 辞

貴重な資料をご提供いただいた，根岸競馬記念公苑（馬の博物館）学芸部長の，末崎真澄先生，現MIHO MUSEUM学芸部長の片山寛明先生に，甚大なる感謝を申し上げます。

#### 参 考 文 献

- 1) 柴田 眞美，美術解剖学からみたウマのレリーフ表現，*Jap. J. of Equine Science*, 3-1, pp29-35 (1992)
- 2) Mami Shibata, An Artistic Anatomical Study on Equine Pose Representation in the Fine Arts: *Jap. J. of Equine Science*, 4-1, pp45-54 (1993)
- 3) 柴田 眞美，造形上のウマのポーズ表現に見る Poetical Reality の分析：美術解剖学雑誌 1-2, pp51-57 (1994)
- 4) 柴田 眞美，美術上の馬の表現及び日本画「冬の馬」制作：文化女子大学紀要 服装学・造形学研究 32, pp83-91 (2001)
- 5) 中尾 喜保，隋人庭騎絵巻に対する馬術および馬匹外貌学的考察：東京藝術大学美術学部紀要 2, pp43-84 (1966)